

苫小牧高専における英語学力テスト導入について

堀 登代彦*・小山直子**・山西敏博***

東 俊文****・松田奏保*****・小野真嗣*****

The Introduction of English Language Proficiency Tests
in Tomakomai National College of Technology

HORI Toyohiko, KOYAMA Naoko, YAMANISHI Toshihiro,
HIGASHI Toshifumi, MATSUDA Kanaho, ONO Masatsugu

abstract

This school year, our college gave English proficiency tests for the first time. In this paper, we describe why they were introduced, what kinds of tests they were, and how they were given. Moreover, we relate our impressions, the data and analysis of the results of the tests, and present our prospects of how we should improve English education in our college.

1. はじめに

本校では今年度から、外部テストを利用した英語学力テストを導入することとなり、その第1回目が平成16年7月6日（火）に、1～3年生の全学生を対象に実施された。

本論では、英語学力テストを導入した経緯や目的、使用した学力テストの概要や実施方法、また今回初めて実施しての感想や反省点、さらに学力テストの成績結果や事後アンケート結果の分析も試みた。併せて、今後の英語学力テスト実施への展望と、本校の英語教育改善への指針も述べてみたい。

2. 学力テスト実施の目的・意義

近年の急速なグローバル化により、世界共通語とも言える英語によるコミュニケーション能力が、各方面でますます要求されるようになってきている。この場合のコミュニケーション能力とは、外国人と直接的に交渉できる能力という意味だけではなく、日本国内において外国人はいない環境であっても、仕事や

* 助教授 文系総合学科
** 教授 文系総合学科
*** 助教授 文系総合学科
**** 助教授 文系総合学科
***** 助教授 文系総合学科
***** 講師 文系総合学科

日常生活の様々な場面で、英語を媒介とする情報に迅速かつ的確に対処できる能力という、もっと幅広い意味で捉えるべきだろう。

この傾向が特に顕著な分野のひとつが、科学技術の世界である。そのため、将来は工業技術者として社会の中堅での活躍が期待される者が多数を占める高専においては、学生の英語運用能力を高めることが英語教師に与えられた大きな使命である。それを端的に示すのが、JABEEや中期目標に、英語力を客観的に測る基準として、TOEICスコアの目標値が掲げられるようになったことである。

その一方で、高専卒業生の英語力は、高校から大学へ進学した者に比べて見劣りがすると従来から言われてきた。カリキュラム的に言えば、専門科目や理数系科目の負担が大きく逆に英語の単位数が少ないからとも言えるが、最大の理由は、大学受験という目の前の大きな目標、あるいはそれに代わりうる目標や強い動機付けが存在しないため、多くの学生が、インテンシブな英語学習を数年に渡って継続的にこなすことがないという点にあるのではないだろうか。

そのような、出題範囲が限定されない、蓄積されたトータルな英語力が試される大学入試（またはその模擬試験）や、あるいは各種検定試験を受けないとすれば、自身の英語力を世間の客観的な基準で知る機会ほとんどないし、客観的基準に基づく目標を自ら設定して、英語学習に励もうと決意することもないわけである。

多くの学生にとっては、出題範囲が狭く限定された定期試験の直前のみが、英語を必死に勉強する期間であり（それすらしない学生も時々いる）、定期試験さえクリアできれば良いと考えているようだ。それでは総合的な英語力はつかないよ、将来は仕事などで英語力も重要になるよ、などと漠然とした言い方をしても、一部の英語好きな学生や将来への必要性を強く感じている学生以外は、なかなかそれについて来ない。

そこで英語科として考えた対応策は、世間の客観的な評価基準に基づいた信頼できる外部テストを、本校の学生全員に定期的に受験させることだった。それによって、年ごとの自分の英語力の伸長度が比較でき、次年度に向けて自分の英語力をどれほど伸ばすのかという目的意識を持たせることが可能となる。これは教師側から言えば、全学生の客観的な英語力を把握して学年ごとの推移を見ることを可能とし、JABEE目標や中期目標へ到達するための目安ともなる。また学生の側から言えば、狭い試験範囲と40名前後の狭いクラス内での局地的な試験結果に一喜一憂して終わるのではなく、自分の英語力が国内的あるいは国際的にどれほどのものかを把握することができる。

そのような大局的な目標設定が可能となることによって、従来の高専生に最も欠けていた平常の英語学習への動機付けを高めることが出来るはずである。そのような意図から今回、英語学力テストを導入することとなった。

3. 学力テストの概要と実施方法

3. 1 学力テストの選定

本校では英語学力の到達目標を、本科終了時でTOEIC 400点（文部科学省に提出した中期目標）、専攻科終了時で430点（JABEEに提出する目標）としている。使用する学力テストを選定する際には、この到達目標のことを念頭に置きながらも、本校5年間の英語科カリキュラムやシラバスとの大きなギャップが生じないという条件も満たすよう考慮して、以下のようにした。

1・2年生においては、語彙的・言語材料的・題材的に検定教科書に準拠しており、また学生にも中学時代から馴染みがあり、さらに本校英語科目の単位認定も行なっている実用英語検定試験（いわゆる英検）に近い形式のテストである英語能力判定テストを採用した。これを製作運営しているのは、英検の実施団体でもある日本英語検定協会である。

3年生では、英検からTOEICへの橋渡しを念頭に置いて、両者の要素を併せ持つ英語運用能力テスト、通称A.C.E.(Assessment of Communicative English)を採用した。こちらは、英語学習教材出版社の桐原書店が、三省堂などとも提携しながら製作運営をしている。なお、TOEICの出題形式に馴染ませるために、TOEICのジュニア版とも言えるTOEIC Bridgeを使う手もあったが、3年生での学習内容やレベルまた使用テキストを考慮し、いきなり全面的にTOEIC形式にシフトするよりも、実用英検とTOEIC

の双方の形式を併せ持つものの方が良いと判断した。さらに、TOEIC Bridge の点数とTOEICの点数の相関関係が不明確であったのに対して、A.C.E.スコアは、TOEICスコアや英検の級との換算が、過去の受験者データからある程度可能であるということや、TOEIC Bridge よりもA.C.E.の方が高専では広く使用されていることなども、A.C.E.を採用した理由である。

3. 2 学力テストの概要

英語能力判定テスト

1. 対象：1年生と2年生
2. 内容：実用英検とほぼ同じ設問形式
3. レベル：1年生＝テストC（実用英検の準2級～4級レベル）
2年生＝テストB（実用英検の2級～3級レベル）
4. 試験時間：60分（リスニング＝25分、筆記＝35分、）
5. 配点：テストC＝570点満点、テストB＝680点満点（リスニング＝30題、筆記＝50題）
6. 成績データ資料：実用英検の相当級を表示、テストA～テストCを同一尺度でスコア表示、
4分野別の正答率を表示（リスニング、語彙・熟語・文法、文章構成、読解）

このテストは、全体の構成が日本の学校英語教育（学習指導要領）に沿った内容になっており、実用英検の級レベルに従って難易度別に3種類のテストが用意されている。そして3種類のテストのスコアは共通の尺度になっているため、使用するテストの種類を学年によって変えても、英語力の伸長度の比較が同一スケールで可能となっている。因みに3種類のテストのレベル（英検相当）と最高点は次の通りである。テストA：準1級～2級レベルで最高800点、テストB：2級～3級レベルで最高680点、テストC：準2級～4級レベルで最高570点。

英語運用能力テスト A.C.E.

1. 対象：3年生
2. 内容：実用英検とTOEICの混合した設問形式
3. レベル：中学既習事項～センター試験レベル
4. 試験時間：80分（リスニング＝35分、筆記＝45分〔内、語彙文法＝15分、読解＝30分〕）
5. 配点：900点満点（リスニング＝300点、筆記＝600点〔内、語彙文法＝300点、読解＝300点〕）
6. 成績データ資料

学生用：4分野別の正答率を表示（リスニング、語彙、文法、読解）、5段階レベル表示、
受験者への全体的&分野別の学習アドバイス

教師用：文法・語彙問題のポイント表、個人別解答一覧表、学級別スコア、個人別スコア

A.C.E.がTOEICと大きく異なる点は、A.C.E.が日本の学校英語教育も念頭に置いて開発されていることである。例えば語彙・文法セクションでは、ネイティブ・スピーカーが日常的に使用し、しかも日本の中学・高校の英語教育でも重要視されている項目を、選りすぐって出題している。従って学生は、ふだんの授業内容とも関連させて自分の学習達成度を把握できる。またリーディングのセクションでは、実践的な運用能力を測定するため、オーセンティシティの高い言語材料を使用しているが、それらの素材には日本の英語教育課程を配慮した語彙・文法コントロールがなされている。

3. 3 学力テストの実施方法

1. 日時：平成16年7月6日（火）の8（～9）時間目の補講時間帯（15時25分までに着席）
1・2年生＝15時30分～16時30分、3年生＝15時30分～16時50分
2. 試験場所：1～3年生の各クラス講義室

3. 受験料 : 銀行口座から5月下旬に自動引き落とし(1・2年生=1500円、3年生=1350円)
4. 試験監督: 文系・理系総合学科の教員(英語科5名+他教科10名、英語科残り1名は全体統括)
5. 成績関連: 各教員の裁量により一定割合で、英語Aの成績評価に組み込む
6. 欠席者 : 受験料は返還するが、特欠や忌引や特別な理由の欠席を除いては、成績は0点とする。

4. 学力テストを実施しての感想・反省点

英語学力テストを今回初めて行なうにあたって、英語科が最も頭を悩ませたのは、どの時間帯で実施するかということであった。我々が当初考えていたのは、前年度の2年生対象の試行テストに倣い、時間割変更をしやすい曜日の1, 2時間目を英語授業に振り替えての実施だった。そしてこの件について教務主事団に相談したところ、主事団側は、我々が全く考えていなかった放課後の補講時間帯での実施を提案してきた。

補講時間帯というのは、JABEE受審を控えて規定以上の授業時間数を確保すること、あるいは中間定期試験の再試験のための補習をすることを主目的に、今年度から本校独自に設けられたもので、今回の英語学力テストとは本来あまり関係のない制度である。

だが主事団側は、補講制度を校内に普及・定着させて外部にもその実績を示すための一環として、また英語学力テスト自体の実績作りのためにも、とりあえず初年度は補講時間帯に英語学力テストを実施するように求めてきた。我々としては、試験当日すでに6~7時間の授業を受け、個人間やクラス間で程度の差こそあれ、多くの学生が精神的あるいは肉体的な疲労を蓄積させた状態で、さらに1時間から1時間半の高い集中力を要する学力テストを強制的に受けさせるこの方法は、その実施効果や試験結果の妥当性などを考えると、本来はあまり受け入れたくない提案であった。しかし、新たな学習行事を多くの教職員の理解と協力を得て立ち上げるということ、特に教務主事団には当初から好意的な協力を仰いできた経緯もあり、今年度はその提案を受けて補講時間帯に実施することとした。ただし、放課後実施の問題点については、学生への事後アンケート結果も提示しながら後述することとする。

また試験時において、実際にどのくらいの欠席者が出るのか、多少不安な面もあった。しかし、ふたを開けてみれば、欠席者は1年生1名、2年生2名、3年生5名の計8名のみであり、我々の心配はほとんど杞憂に終わった。特別な理由のない欠席は、0点扱いで成績評価に組み込まれると事前に告知したことが、功を奏した部分もあったかもしれない。

さらに試験運営上の反省点として、特に3年生において、試験の進行が予定より10分以上も遅れたクラスが出たことがあげられる。その原因の一つは、7時間目終了時刻(15時15分)から受験者データ記入のための着席時刻(15時25分)まで僅か10分しか間を置かなかったために、所用でいったん席を離れた学生の着席が遅れて、受験者データ記入の開始が遅れたことである。さらに、受験者データ記入時間を、15時25分から30分までの5分間と見積もっていたが、3年生のA.C.E.では3枚の解答用紙すべてに受験者データを記入しなければならないという煩雑さから、実際にはこれに10分程度も要したことも、進行の遅れに拍車をかけた。その結果、3年生のテスト終了時刻が、事前には16時50分と知らせていたのだが、17時を過ぎるクラスも出てしまうこととなった。次回からは、もう少し余裕を持ったスケジュールで進めなければならない。

5. 学力テストの成績結果と考察

5. 1 英語能力判定テスト—1, 2年生

日本英語検定協会の指針によれば、3級が中学卒業程度のレベル、準2級が高校中級程度のレベル、そして2級が高校卒業程度のレベルとなっている。それに基づいて考えると、表1において、1年生で3級以上のレベルの者、すなわち中学での学習内容が大方定着していると考えられる者は70%となる。それに対して2年生で準2級レベルの者は、高校中級レベルというのが2年生の中間時点を指すならば、13%とやや低い割合に留まっている。受験時の7月上旬は、中間時点と言うには多少早めであるが、もう少し準2級レベル到達者を増やせるように手段を講じていくべきだろう。

さて、表1から1年生と2年生の成績を比較すると、上位級である2級や準2級レベルの人数は、当然のことながら2年生の方が1年生より多くなっている。しかし、最下位級である4・5級レベルの人数は、常識的な予想に反して2年生の方が多くなっており、4級と4・5級レベルを合わせた人数で比較しても、1年生と2年生が同数となっている。また全体の平均点を比較しても、2年生は1年生より僅か5点高くなっているに過ぎない。

このテストは前述したように、難易度別に3種類あるが、どの難易度のテストのスコアも、それとは異なる難易度のテストのスコアと同一尺度で比較できることになっている。もしそうだとすれば、下位集団においては、1年間も多く英語学習をしているはずの2年生の英語力が、1年生とほとんど変わらないことになってしまう。しかし、英語が極端に苦手な者あるいは不勉強な者が2年生には若干名いる、今の2年生の方が入学時から英語ができなかった、2年生の一部学生がテストに真剣に取り組まなかった（1年生より2年生の方が横着になる傾向は確かにありうる）などの要因が重なって、この結果になったと言えるのかもしれない。

しかしながら、そのような不確かなことを詮索するよりも重要なことは、同一学生あるいは同一学年が1年後、2年後、数年後にどの程度の伸長度を示すかということである。実証的に比較しうる2年間のデータが出揃う来年度の2年生において初めて、一つの学年の全学生一人一人の英語学力の変化や、一つの学年全体の英語力の推移を、ある程度客観的に捉えることができるはずである。その結果を見ることで、我々の英語学習指導方法の改善すべき点もいっそう明らかになるだろう。

表1 英検の各級相当レベルの人数および平均点

レベル	2級	準2級	3級	4級	4・5級	受験者数	平均点
1年生	0	16	127	53	5	202	370 (/570)
2年生	1	25	118	47	11	203	375 (/680)

表2 1年生の分野別平均正答率(%)

語彙・熟語・文法	74
文章構成	26
読解	70
リスニング	67

表3 2年生の分野別平均正答率(%)

語彙・熟語・文法	44
文章構成	42
読解	54
リスニング	53

表2と表3からは、学生の英語能力のどの分野が優れているか、あるいは劣っているかが把握できる。ただし、この表の正答率の数値から1年生と2年生の間の優劣を判定することはできない。テストBとテストCの問題の難易度が違うからである。

1年生では、語彙・熟語・文法、読解、リスニングの3分野で比較的高い正答率を示したが、文章構成だけが大きく落ち込んでいる。それに対して2年生では、良くも悪くも突出した分野がなく、4分野で満遍なく50%前後の正答率を示している。

5. 2 A.C.E.（英語運用能力テスト）— 3年生

表4は、今回実施したA.C.E.における、本校3年生208名のスコア分布である。この中の、5段階に分けられたA.C.E.レベルと900点満点のA.C.E.スコアは、本校に関しては前回のデータがなく比較不能なため、今回に限ってはそれ自体ではあまり意味をなさない。従ってここでは、TOEICのスコアや英検の級に換算した場合について考えたい。

また、表4から読み取れる換算されたTOEIC相当スコアや英検相当級は、あくまでも大まかな目安に過ぎないことにも注意しなければならない。この換算表は、A.C.E.を実施している英語運用能力評価協会が、過去のA.C.E.受験者に対するアンケート調査およびTOEIC運営委員会（TOEICを実施運営している団体）の資料をもとに作ったものであるが、それぞれのテストは、その性格や目的、また設問の形式や内容がかなり異なっているため、単純には比較できない部分も含まれている。

表4 A.C.E.の得点分布表(900点満点、受験者208名)

A.C.E.レベル	A.C.E.スコア	人数分布	人数累計	TOEIC 相当スコア	英検取得者の A.C.E.平均スコア
レベル5	900－				
	880－				
	860－				
	840－				英検準1級平均スコア(821)
	820－				
	800－				
	780－			700－	
レベル4	760－			680－	
	740－	1	1	640－	
	720－	1	2	600－	
	700－			560－	
レベル3	680－			540－	
	660－			520－	英検2級平均スコア(655)
	640－	1	3	500－	
	620－			480－	
	600－	3	6	460－	
	580－			440－	
	560－			420－	
	540－	1	7	400－	英検準2級平均スコア(534)
	520－	9	16	380－	
レベル2	500－	9	25	360－	
	480－	18	43	350－	英検3級平均スコア(480)
	460－	25	68	340－	
	440－	41	109	330－	
	420－	32	141	320－	
	400－	32	173	310－	
	380－	21	194	300－	
レベル1	360－	8	202	290－	
	340－	4	206		
	320－	2	208		
	300－				
	280－				
	260－ 0				

注1) 英検取得者の平均スコアは、A.C.E.受験者へのアンケート集計結果によるもの(総数 26664 名)

注2) TOEICスコアと英検の級の相関関係は、TOEIC運営委員会の資料によるもの

注3) ACEスコアとTOEICスコアの相関関係は、上の二項から算出されたもの

本校3年生の平均点は427点で、これはTOEICの320～330点に相当する。本校の本科卒業時の到達目標であるTOEIC400点相当(A.C.E.540点以上)を、この時期にすでに越えている者は6名だった。ただしその内の2名は外国人留学生、また1名は高専入学後に1年間のアメリカ留学を経験した者である。

また、TOEICの350～400点に相当するもの(A.C.E.480～540点)は19名で、全体の

約8分の1、逆にスコアの低い方では、TOEIC300点未満相当（A.C.E.380点未満）が35名となっており、全体の約4分の3の者がTOEIC300～450点相当（A.C.E.380～480点）に集中している。

今回の結果だけからでは、現在の3年生の多くが、高専を卒業するまでにTOEIC400点に到達できそうなのか、それともかなり厳しい状況なのか、判断することはまだ難しい。多少の不確かさはあるが判明したことは、3年生の前期の半ばにおいて、TOEIC320～330点相当の者が多数を占めているという事実である。あと2年半強で、少なくともTOEIC70～80点相当分の英語力を、できるだけ多くの学生に身につけさせることが、我々に与えられたノルマとも言えようか。

その場合、3年生は英語科目の単位数が4なので、残り半年強でかなりの英語学習量を確保できるが、問題は4年生と5年生である。英語科目が2単位に半減した上に、専門科目の学習や研究にかかる比重が高まり、インターンシップや就職あるいは進学への準備にも時間をとられる。単位数が半減した分を、授業担当者が多量の課題を出して埋め合わせるのか、または学生の自学自習に期待するのか。

ところで、今回の学力テスト終了直後に、筆者が試験監督をしていたクラスのある学生（このクラスで最も英語の成績が良い学生である）が、筆者に試験内容についての不満を申し出た。それは、リーディング問題の量が多すぎて時間内にこなせなかった、ふだんの授業で多量の英文を速読理解する練習をしていないのだから出来るはずがない、という内容のことだった。恐らく他の多くの学生も同じ感想を持ったに違いない。英文のレベル自体は、3年生で使っている教科書よりかなり易しいのだが、速読的な理解を求められた場合に対応できなかったのだろう。しかし、これがまさにTOEIC的な側面であり、4・5年生でのTOEIC受験への橋渡しとして、3年生にも導入した目的でもあった。

ここで明らかになったのは、低学年における速読練習の不足である。夏冬の長期休暇用には、確かにサイードリーダーを課題に出しているが、これは速読というよりもむしろ多読を目指している。短時間に緊迫感を持って英文情報を読み取る練習は、ほとんど行なわれていないようだ。そのような練習を、1・2年生の頃から本校の英語授業で組織的に実施するよう考えていかなければならないだろう。

表5 A.C.E.平均スコア 2004年度第1回(2004年4月～9月実施)

	本校3年	高専3年	高専2年	高専1年	高校3年	高校2年	高校1年
総得点/900	427	402	407	392	440	424	415
語彙 /150	78	74	77	74	82	77	75
文法 /150	69	66	67	67	73	70	67
リーディング/300	130	120	119	115	135	129	124
リスニング /300	150	142	144	136	150	148	149
受験者数	208	666	911	375	2103	10155	5508

表5の本校3年生の平均スコアからは、語彙力とリスニング力が、文法力やリーディング力よりは高いことが読み取れる。この傾向は、高専高校あるいは学年を問わずすべてに見られ、本校だけの特徴ではないのだが、あえて本校に限って言えば、次のような理由が考えられる。

語彙に関しては、入学時から単語集を購入させて毎週単語テストをしてきたこと。リスニングに関しては、2年生後期でリスニングに特化した授業を週2時間受け、さらに今年度はリスニング専用の副教材を使って、テキスト理解とテスト実施のサイクルを毎週行なってきたこと。

それに対して文法は、今の3年生は1年生で2単位、2年生で1単位を履修してきたが、ひょっとしたら、メインの検定教科書と全く切り離して文法学習をしてきた弊害が出ているのかもしれない。またリーディングのスコアが相対的に低いのは、高校ではたいてい3年生で履修されるリーディングに特化した授業が、高専では単位数の少なさから実施できないこともあろうが、何よりも、訳読や精読によらず迅速に英文情報を把握する経験が乏しいことが、大きな原因としてあげられよう。

次に、本校3年生と高専生全体と高校生全体のA.C.E.スコアの平均値を比較してみよう。ただし、高専生や高校生の全体と言っても、受験者数からわかる通り、母数がかなり小さい。また、高専間の学力的格差は少ないだろうが、高校間の格差はかなり大きい（実施担当者によれば中位から上位の学校が多いというこ

とだが)。そのような理由で、データの信頼性には多少欠ける部分があることは前提にしなければならない。

まず高専全体と高校全体を比較すると、すべての学年において、高校の方が高専よりスコアが高くなっている（分野別では一部で同スコアもある）。そして、高専と高校の間に特に際立った差が表れているのが、2年生から3年生へのスコア推移の格差である。高校の場合、1年生から2年生へは9点アップだが、2年生から3年生へは16点もアップしている。ところが高専の場合、1年生から2年生へは15点アップしているにも拘らず、2年生から3年生へは5点のダウンとなっている。このようなデータを見せられると、英語単位数が高専より多く、大学受験という英語学習への大きな動機付けも保持している高校生の英語力が高専生は及ばないという通説を、改めて認めざるを得ないという気になる。

本校のみに限定して言っても、残念ながら高校3年と比べた場合は、全体的に見劣りがする。分野別でも、語彙・文法・リーディングの3分野では、4～5点劣っている。ただしリスニングにおいては、高校3年と同スコアになっていることから、先ほど述べたようにリスニングにかなり力を入れた成果が表れたと言える。また高専3年生全体と比較すると、総スコアおよび分野別スコアのすべてで本校が若干上まわっていることが、今回のデータからは読み取れる。

6. 事後アンケートの結果と分析

6. 1 英語学力テスト・アンケートの実施

英語学力テスト終了後1週間以内の英語Aの授業時に、記名でのアンケート調査を実施した。

A. 実施環境について

Q 1 実施時期はどうでしたか。

ア. 良かった イ. 悪かった

Q 2 8時間目以降の補講時間での実施は精神的・体力的にきつかったですか。

ア. はい非常に イ. はい多少は ウ. いいえ

Q 3 リスニング試験時に教室外の雑音で音声が聞きづらかったですか。

ア. はい非常に イ. はい多少は ウ. いいえ

Q 4 筆記試験の妨げになる教室以外の雑音がありましたか。

ア. はい非常に イ. はい多少は ウ. いいえ

Q 5 Q 3、Q 4で「はい」を選んだ人はその雑音を具体的に書いてください。

B. 試験について

Q 6 このテストを来年以降は次のどの時間帯で実施してほしいですか。

ア. 1・2時間目 イ. 3・4時間目 ウ. 5・6時間目

エ. 7・8時間目 オ. 補講時間帯

Q 7 今回の試験の目的や意義は理解していましたか。

ア. はい十分に イ. はい多少は ウ. いいえ

Q 8 リスニング・テストの難易度はどうでしたか。

ア. 非常に難しい イ. 多少難しい ウ. 多少易しい エ. 非常に易しい

Q 9 筆記テスト（リスニング以外）の難易度はどうでしたか。

ア. 非常に難しい イ. 多少難しい ウ. 多少易しい エ. 非常に易しい

Q 10 テスト全体の難易度はどうでしたか。

ア. 非常に難しい イ. 多少難しい ウ. 多少易しい エ. 非常に易しい

C. 今後について

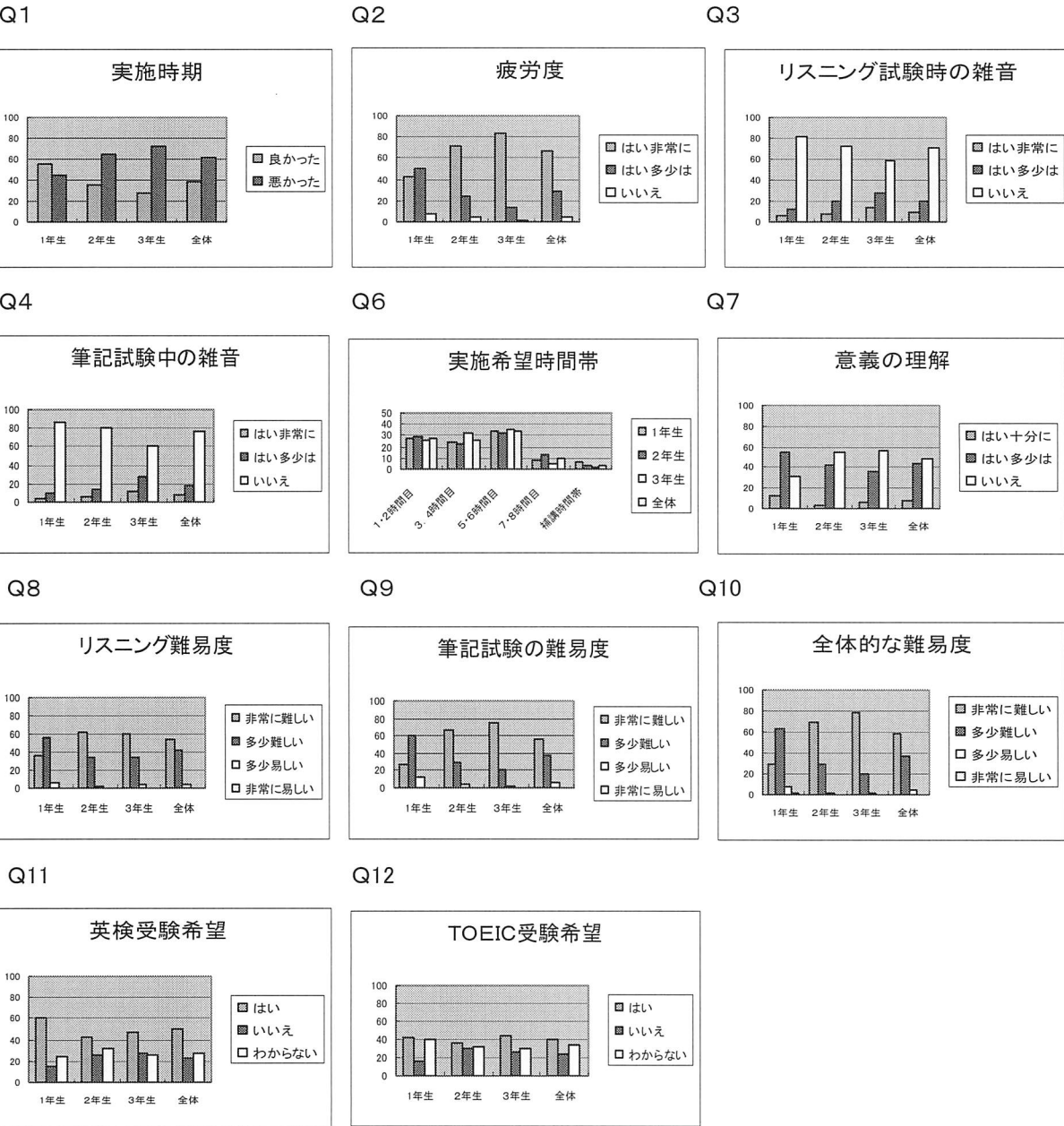
Q 11 今後実用英検を受験してみたいですか。

ア. はい イ. いいえ ウ. わからない

Q12 今後TOEICを受験してみたいですか。
ア. はい イ. いいえ ウ. わからない
Q13 その他、何かあれば自由に書いてください。

6. 2 アンケートの結果

記号選択式設問の結果は、以下のグラフのようになった。なお、グラフの縦軸は%である。



また、自由記述式設問のQ5とQ13に関しては、3名以上の学生が指摘した意見のみ以下に記す。

Q5 試験中に集中力の妨げになった雑音の内容

(1) 教室外からの雑音

66名：教室外からの話し声（含、低学年の声、笑い声）

52名：他のクラスのリスニングテストの音

20名：教室外での雑音（含、足音）

(2) 教室内の雑音

8名：CDやカセットテープ自体の雑音（含、ノイズ、音割れ）

3名：先生が机を動かしたための音飛び

Q13 その他

(1) 実施時期や実施時間帯に対する不満

57名：補講時間は不適當（含、下校時間や交通機関等の考慮）

8名：実施予告はしてほしい

(2) 難易度に対する不満

23名：解答時間が足りない

23名：難しい（含、集中力が持たない、精神的に疲れる）

6名：問題が多い（含、問題をシンプルにしてほしい）

3名：試験時間が足りない

3名：試験時間が長すぎる

(3) テストの解答方法に対する不満

10名：マークしづらい

3名：リスニングが2回繰り返されず1回しか聞けず戸惑った

(4) 受験に対する不満

23名：2度と受験したくない（含、廃止してほしい、不要）

22名：費用の自己負担はいやだ（含、資格試験なら自己負担するが）

14名：実施の意味・意図がわからない（含、試験実施を考え直してほしい）

12名：希望者のみの受験にしてほしい

7名：学力試験よりも英検やTOEIC等の資格試験を受けたい

(5) その他

7名：成績に反映させないでほしい

7名：高専の授業レベルが低い

6名：学力試験への対策授業・プリントが必要（含、何を勉強すべきか不明）

5名：アンケートに名前を記入する必要があるのか

6. 3 アンケート結果の分析と考察

Q1の「実施時期」という言葉の意味を、1年間の中での時期と取らずに、1日の中での時間帯と取った学生が多かったようだ。それは、Q1で「実施時期が悪かった」と答えている者が全体の過半数を越えているにもかかわらず、Q13の自由記述式回答で「補講時間帯は不適當」と書いた者が57名にも上ったのに対し、7月上旬の実施時期に対する不満を書いたものが皆無だったからである。

さらにQ2とQ6の回答が、それを裏付けている。補講時間帯での実施が精神的・体力的に非常にきつかったとした者が、2年生で71%、3年生では84%にも達しているし、実施希望時間帯では1～6時間目の中の3種類の時間帯に希望が集中しており、補講時間帯希望者は、1年生で6%、2年生で3%、3年生に至っては1%であった。

またQ3とQ4での、試験への妨げとなる教室外の雑音への不満は、記号選択の回答では割格的にはそれ

ほど多くないが、Q5の自由記述の回答を見ると、66名の者が「教室外からの話し声」、20名の者が「教室外での雑音」によって集中力を妨げられたと書いている。52名が指摘した「他のクラスのリスニング・テストの音」については、教室位置の関係上から改善の難しい面もあるが、必要以上にボリュームを大きくすることのないよう、また暑い時期の実施でもリスニング時だけは出来るだけドアや窓を閉めるよう、今後は試験監督の教員にも徹底を図りたい。

Q7からは、英語学力テスト実施の目的や意義が、学生側に十分浸透していなかったことがわかる。実際には、事前に英語教員間で確認し合った内容を、テスト実施数週間前に全クラスに伝えたはずなのだが、十分に理解されていない部分もあったようだ。今後とも折に触れて、学生にその目的を話していきたい。

Q8～Q10では、初めて受験した英語学力テストについて、多くの学生が多かれ少なかれ難しいと感じたようだ。1年生では「非常に難しい」よりも「多少難しい」の方が多かったが、2・3年生になると、「非常に難しい」が「多少難しい」を大きく上まわっている。その理由として、高専入学後は出題範囲の限定されない実力テストや模擬試験や資格試験などの受験経験が乏しいこと、試験のレベルが2年生では英検2級レベルに3年生ではセンター試験レベルにまで及んでいたことがあろう。さらに3年生のテストでは、読解問題において、これまでほとんど経験したことのないレベルの速読力を要求されたことがあげられよう。これは成績結果にも表れており、スピード・リーディングを低学年から授業に取り入れる必要性を英語教員に感じさせた。

この学力テストは、彼らがふだん経験している中間定期試験とは、形式的にも内容的にも大きく異なるもので、多くの学生が慣れないテストに苦戦を強いられたようだが、Q11やQ12の結果を見ると、その割には少なからずの学生が、今後の英検やTOEIC受験に対して積極的であることもわかる。特に2年生と3年生を比較すると、英検でもTOEICでも、3年生の方が受験してみたい割合が増加している。これは、学年が上がっている分、将来に向けての英語力の重要性を自覚し、資格試験にも挑戦しながら自分の英語力を客観的に把握し、そして高めていかなければならないと考えているとも受け取れる。これら資格試験の受験に消極的な者に対しては、教員からのいっそうの啓発が必要とされよう。

7. まとめ

ここ数年来、全国の高専の多くが、学生の英語力伸長を図って外部テストを導入するようになった。その意図は、2.で述べた通りである。したがってそれは、従来のような希望者だけが英語資格試験（主に実用英語検定）を受験する形ではなく、いくつかの学年（高専によっては全学年）の全員に受験させる形となっている。使用されているテストは、TOEICあるいはTOEICのIPテスト（TOEICの過去問題を利用して安価で任意の団体が受けられるが、その獲得スコアは正式のものとしては扱われない）か、またはいくつかの業者の数種類のテストにほぼ限定されているようだ。

本校でも切迫した必要性を感じ、今年度から、他の多くの高専でも使われている外部テストを利用して、英語学力テストを行なうこととなった。実施してみた結果、本校学生の英語力の実態や、本校英語科カリキュラムおよびシラバスの問題点など、これまで不明確であった様々なことがわかってきた。

英語学力テスト実施の初年度は、1～3学年を対象に標記のテストを実施した。来年度に向けて、1～3年生では今回のテストを継続使用すべきかどうか、また4年生と5年生においても新たに英語学力テストを取り入れるのか、取り入れるとすればTOEIC（IP）に挑戦させるのかどうかについても、英語科内で十分な議論を重ねていかなければならない。さらに、実施上の大きな問題点となった実施時間帯については、お金を払って受験する学生の側の便宜も十分に尊重できるよう、本校の関係各部署とも改めて検討していきたい。

いずれにしても、英語学力テストが、学生の英語力伸長の指標として、また教員の英語指導の指標としても、今後大きな役割を果たすことは確実であることが、このテストを実施してみて明らかになった。グローバル化がいっそう進むであろう21世紀、この時代を生き抜くのに重要なツールとなる英語力の基礎基本を学生全員に身につけさせることは、英語教員に与えられた責任であり使命であろう。

参考資料

- 1) 英語能力判定テスト 団体成績表と個人別成績表 日本英語検定協会 (2004年7月)
- 2) 第4回ACE 教授用資料 英語運用能力評価協会 (2004年7月)
- 3) A.C.E. Letter 第4号 英語運用能力評価協会 (2004)
- 4) A.C.E. Letter 第3号 英語運用能力評価協会 (2003)
- 5) A.C.E. Letter 第2号 英語運用能力評価協会 (2003)

(平成16年12月15日受理)